

高尾山 歴史の散歩道 40

明治大学博物館

外山

徹

寛永伽藍



旧大日堂 現大師堂

仁王門の奥、現在の大本堂の位置には、中央に一回り大きい薬師堂、右に大日堂、左に護摩堂と三棟の堂宇が並んで建てていた。江戸前期、寛永年間（一六二四〜四四）に再興された堂宇群である。

この内、護摩堂は移築され、現在は奥之院不動堂となっている。建築様式から寛永期の建立とされ、いち早く東京都の重要文化財に指定された。現在、大本堂の脇に建つ大日堂は、かつての大日堂であり、その規模と宝形造り流れ向拝、軒に反りのついた屋根は、奥之院不動堂に実によく似た作りである。後世修築の手が入って若干変わっているが、基本的に護摩堂と同じ様式を持つており、寛永の建立当時の建物と推定されている。

文政期（一八一八〜三〇）の絵図類を見ると、中央の薬師堂も、規模こそ違うものの建築様式としては、左右の堂にほぼ

同じであることが分かる。これらの堂の詳細を徳川幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』（文政五年・一八三二）に拠って詳細を見てゆこう。

薬師堂

門ヲ入テ正面ニアリ。四間四方茅葺ニテ南向フ。薬師堂ノ額字ハ黄檗僧悦山ノ書ナリ。本尊瑠璃光仏木ノ坐像。長二尺バカリ。行基菩薩ノ作ナリト言。脇士日光月光ノ二像。長各二尺三寸バカリ。十二神ノ像。長一尺八寸バカリ。共二運慶ノ作ナリト言伝フ。年々四月十二日。薬師講行ハル。四間四方は一六坪、幅・奥行とも約七・二メートルとなる。悦山は中国福建省出身の渡来僧。黄檗僧と言えば隠元隆琦が有名だが、同宗の僧侶は書画をよくしたことで知られる。

行基作という薬師像は創建の伝にある像ということになるが、現在は秘

仏として公開されていない。脇侍の日光・月光菩薩は現在大本堂内陣に、一七世紀後半造立と推定される像が安置されている。同じく十二神将像は近代のものである。神将像は、頭部のみ室町期一五〜一六世紀と推定される一体が残っているが、何れも運慶作の伝というのは時期的には合わない。仁王門の仁王像の胎内から発見された銘札には、延宝五年（一六七七）十一月晦日に火災があり、薬師堂が焼失したことが記されている。仁王像の再興が貞享元年（一六八四）と云うので、薬師堂はまさに山内の中心にある堂であるから、恐らくそれに先立つ時期に復興されていたのではないか。日光・月光菩薩像は延宝火災後の再興時に年代が一致する。また、神将の頭部は、かろうじて焼失をまぬがれたものかも知れない。時期的には後源による中興後、ないし後北条時代にあたる。

なお、四月一二日は現在も薬師如来の縁日として受け継がれている。

大日堂

薬師堂二向テ右ニアリ。三間四方。南向ナリ。大日堂ノ三字ヲカク。佐々木玄龍ノ書ナリ。大日木ノ坐像ヲ安ズ。長二尺バカリ。作シレズ。

現在は大師堂と呼ばれる堂は、薬師堂に較べ四分の三のスケールである。佐々木玄龍は江戸時代中期の書家。現在は堂の名が変わっているの、当然、弘法大師空海の像が祀られているが、寺内にある大日如来像として大本堂内陣の胎藏界・金剛界二体がある。一七世紀後半と推定される金剛界木造大日如来坐像の座高が一致する。なお、胎藏界大日如来は一八〜一九世紀の造立で、『風土記稿』による旧本堂に安置されたものに比定できる。往時は茅葺屋根であったが、現在は銅板瓦葺葺

となっている

護摩堂

同ジク向テ左ニアリ。コレモ三間四方。南向ナリ。護摩堂ノ三字ヲ扁ス。悦山ノ書ナリ。不動ノ木像ヲ安ズ。長三尺五寸バカリ。智証大師ノ作ナリ。二童子長各一尺五寸作シラス。スケールは大日堂と同じ。扁額の筆は薬師堂と同じ黄檗僧である。

現在、奥之院不動堂に安置されている不動明王像は立像である。記事には木像とあるだけだが、同じ時期の『武蔵名勝図会』は立像としている。矜羯羅・制吒迦の二童子像を従えているのも同じだが、像高には異同がある。時期は一四世紀・鎌倉期とされる。そうすると、智証大師すなわち円珍の作というのは時代が合わない。園城寺ゆかりの天台僧円珍と高尾山では、修験者という以外に具体的な接点を探りにくい。とこ

ろが、文化財調査の結果明らかになっている山内最古の仏像は、実は一二世紀・平安後期の不動明王坐像頭部である。それでも、円珍の時代よりはかなり新しいが、この不動明王像が後世持ち込まれたものではないとする、現存する最も古い歴史遺物となるが、果たしてどうだろうか。

他二堂と同じく茅葺屋根であったが、現在は銅板厚板葺きとなっている。大日堂と似たイメージであるが、軒が二重扇極木となっているのが大日堂

（本繁二重極木）との相違である。興味のある向きは写真を撮って見比べてもらいたい。

堂のその後

久しく伽藍の中心であった三つの堂宇であるが、その終焉は今から一二九年前に突然訪れる。明治一九年（一八八六）九月の台風によって崖崩れが発生。薬師堂が被害を受け、現在の書院の位置にあった本堂も倒壊した。再建の計画は全くの旧に復するというのではなく、本堂にはより大き



旧護摩堂(現奥之院不動堂)

な堂をということで、寛永伽藍の位置に大本堂が建立されることになった。大日堂は同じ平地の東の縁に移され大師堂となり、護摩堂はより高い位置に移設されて奥之院不動堂とされた。江戸期の絵図にも奥之院が描かれているので、これも被害を受けたのかも知れない。明治三四年（一九〇一）、寛永伽藍の跡地には現在の大本堂が落成する。台風による被災からは一五年の歳月を経っていた。薬師堂は倒壊したものの、その部材を利用して京王高尾駅の南にある法類の大光寺の旧本堂が建立された。部材の老朽腐食により一九七四年五月に解体されている。

《参考文献》

小町和義「高尾山の建築について」（『多摩文化第二四号武州高尾山その自然と歴史』一九七四）『高尾山薬王院文化財調査報告』（東京都教育委員会、二〇〇三）